

FLORA KANAGAWA

Feb. 29. 2008 No.66

神奈川県植物誌調査会ニュース第 66 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内

神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>

e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195



左：ルイヨウボタン（相模原市鳥屋 2007 年 5 月 7 日 諏訪哲夫 撮影）、右上：アマナ（厚木市飯山 2006 年 4 月 6 日 諏訪哲夫 撮影）、右下：サガミラン（厚木市中荻野 2005 年 7 月 18 日 諏訪哲夫 撮影）。詳しくは本文 814 ページを参照してください。

目次

勝山 輝男：アオイゴケとカロリナアオイゴケ	812
城川 四郎：神奈川県内未記録植物の報告	813
諏訪 哲夫：県央付近の新記録種について	814
浜口 哲一：平塚にアレチニシキソウ	816
吉田多美枝：川崎にミズヒマワリ	816
秋山 幸也：相模湖町のキセワタとアキノハハコグサ	816
林 辰雄：鉢から出てきたショウジョウソウモドキ	817
浜口 哲一：ツタの葉柄	818
田中徳久：『神植誌 01』の「植物の種類数」の訂正	818
事務局より	818

アオイゴケとカロリナアオイゴケ

(勝山輝男)

2004年にトカラ列島の黒島でアオイゴケを見た際、神奈川県産のカロリナアオイゴケとの区別について疑問を持ったが、そのままになっていた。Flora Kanagawa No. 65で堀内洋氏がカロリナアオイゴケについて報告されたの(堀内, 2007)と、生命の星・地球博物館の帰化植物に関する講座(2007年9月8日)の話の種にと思い、調べ直してみた。なお、この内容に関しては前述の講座で話題提供し、2007年9月12日、帰化植物メーリングリスト[naturplant:3301]に書き込みを行った。

カロリナアオイゴケ *Dichondra carolinensis* Michx. は、1955年頃からダイコンドラの名で芝生として用いられたもので(染谷, 1963)、森(1988)は『神奈川県植物誌 1988』でアオイゴケとの区別点を保留しつつ、横浜市や湘南地域への逸出帰化を報告した。当時、アオイゴケとカロリナアオイゴケの区別点について書かれたものは、杉本検索誌(杉本, 1978)のみで、アオイゴケは葉が腎円形で有毛、カロリナアオイゴケは卵円形で無毛と書かれていた。森(1988)はアオイゴケとカロリナアオイゴケの区別がはっきり分からないまま、園芸店で売られているダイコンドラと横浜市内で採集されたものが同じものと判断してカロリナアオイゴケと同定した。

アオイゴケ *D. micrantha* Urb. は世界の熱帯～暖帯の庭や路傍の半裸地に生育する小型の多年草で、日本では千葉県以南に分布する。学名は長い間、ニュージーランドを基準産地とする *D. repens* J.R. Forst. et G.Forst. が用いられてきたが、*D. repens* はオセアニア～マレーシア地域に分布するもので、旧世界の熱帯～暖帯に広く分布するものは *D. micrantha* が用いられるようになっていく。Flora of Japan (Yamazaki, 1993) や杉本検索誌(杉本, 1978)では、すでに *D. micrantha* が使用されている。アオイゴケの葉の下面には伏した毛が密生するが、上面は無毛または疎らに短毛が生えるのに対して、*D. repens* は葉の両面に伏した絹毛が密生することで区別できるという (Webb et al., 1988)。

カロリナアオイゴケ *D. carolinensis* は北米東南部(テキサス～アーカンサス～バージニア以南)とバミューダ諸島、バハマ諸島に分布するもの

で、北米の古い植物誌 (Gleason, 1952 ほか) ではアオイゴケと同様に *D. repens* が用いられていたが、その後、*D. repens* var. *carolinensis* (Michx.) Choisy に変更され、最近では独立種 *D. carolinensis* として扱われている。

手許にある北米の植物誌でアオイゴケ *D. micrantha* とカロリナアオイゴケ *D. carolinensis* を比較した記述のある文献は少ないが、Correl & Correl (1972) や Wunderlin (1998) の検索表によると、アオイゴケの花(果)柄は花時に葉柄の1/4-1/2長で、上部で曲がり、萼片の長さは幅の1.5-2倍で、果実は萼片よりも長い。一方、カロリナアオイゴケの花(果)柄は花時に葉柄の1/3-2/3長で、直立し、萼片の長さは幅の2-3倍あり、果実は萼片と同長または短い。

これをもとに、生命の星・地球博物館の神奈川県産の標本をチェックしたところ、花や果実のある標本は数点に限られるが、いずれも花柄はきわめて短く、柄の上部は屈曲し、萼片の長さは幅の2倍程度で、果実は萼片よりも超出し、アオイゴケ *D. micrantha* の特徴によくあう。また、『神奈川県植物誌 2001』(秋山, 2001)に図示されているものもアオイゴケとみなせる。生命の星・地球博物館にある神奈川県産の標本は花や果実のない標本も含めて、葉形や葉質に違いはなく、アオイゴケ *D. micrantha* であると判断した。

それでは、日本にカロリナアオイゴケは帰化しているのだろうか? 『千葉県植物誌』(大場, 2003)はアオイゴケの葉は腎円形で中央部の幅が広く、先端はやや凹頭、カロリナアオイゴケの葉は卵円形で中央より下がもともと幅広く、先端は平円形としているが、葉の形だけでの区別は難しいと思う。また、図示されているカロリナアオイゴケの写真も萼片の幅は広く、アオイゴケと区別ができない。平凡社の『日本の帰化植物』(山崎, 2003)の記述は、カロリナアオイゴケのようにも思えるが、前述した区別点には言及せず、葉がやや大きく、萼や果実に長い毛があることでアオイゴケと区別できるとしている。しかし、アオイゴケの萼や果実にも長い毛が密生しており、両者の区別点にはならない。また、掲載されている写真のうち、三重県鈴鹿市のものは萼片が幅広く、花柄も短く、明らかにアオイゴケである。

まだ十分な数の標本は検討していないが、確実にカロリナアオイゴケと同定できる標本や写真

はまだ見ていない。日本産のカロリナアオイゴケとされている標本については、前述した違いに着目して再検討する必要がある。北米の太平洋側の植物を扱った Abrams (1951) には、アオイゴケ *D. micrantha* が *D. repens* の名で掲載され、熱帯原産で芝生に用いられ、逸出していると記されている。しがって、日本でダイコンドラの名で栽培されるてきたものも、カロリナアオイゴケ *D. carolinensis* ではなく、アオイゴケそのものだった可能性がある。野外あるいは園芸店などで、カロリナアオイゴケ *D. carolinensis* と思われる植物に出会ったら、標本の作成と一報をお願いしたい。

引用文献

- Abrams, L. 1951. Illustrated Flora of the Pacific States, Vol. III. 866pp. Stanford University Press, Stanford.
- Correl, D.S. & Correl, H.B. 1972. Aquatic and Wetland Plants of Southwestern United States. xv+1777pp. Environmental Protection Agency, Washington.
- Gleason, H.A. 1952. The New Britton and Brown Illustrated Flora of the Northeastern United States and Adjacent Canada, Vol.3. New York Botanical Garden, New York.
- 堀内 洋, 2007. 横浜市神奈川区におけるカロリナアオイゴケの採集例. *Flora Kanagawa*, (65): 806-807.
- 森 茂弥, 1988. ヒルガオ科. 神奈川県植物誌 1988, pp.1060-1065. 神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館.
- 大場達之, 2003. ヒルガオ科. 千葉県史料研究財団編, 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌, pp.469-472 & pp.478-481. 千葉県.
- 杉本順一, 1978. 改訂増補日本草本植物総検索誌, I 双子葉編. 871pp. 井上書店.
- 染谷邦夫, 1963. 1 円玉の芝生植物—ダイコンドラ. 植物採集ニュース, (7): 27.
- Wunderlin, R.P., 1998. Guide to the Vascular Plants of Florida. 806pp. University Press of Florida, Miami.
- Webb, C.J., W.R. Sykes & P.J. Granock-Jones, 1988. Flora of New Zealand, Vol. IV. New Zealand Botany Division, Christchurch.
- 山崎 敬, 2003. ヒルガオ科. 清水建美編, 日本の帰化植物, pp.160-164 & Pls.72. 平凡社, 東京.

神奈川県内未記録植物の報告

(城川四郎)

1. シソ科ヤグルマハッカ属の 2 種

① ハリゲヤグルマハッカ (新称) *Monarda dispersa* Small

観賞植物として栽培されるヤグルマハッカやタイマツバナはヤグルマハッカ属 *Monarda* に所属する。この属はアメリカではよく分化して多数の種を形成しているが、日本ではこの属の自生種はない。神奈川県ではヤグルマハッカやタイマツバナの逸出として確認されたものがないため『神奈川県植物誌 1988』にも『神奈川県植物誌 2001』にもヤグルマハッカ属は全く登場していない。ヤグルマハッカ属は花冠下唇が 3 裂し、雄ずい 2 本は完全で、2 本が退化して小さい。花冠は明らかに唇形で葯隔は長く伸びるなどの点ではアキギリ属に一致する。しかし、萼が 2 唇ではなく、等しく 5 裂する点で区別される。さて、標題の植物は吉川アサ子さんが 1998 年 7 月 1 日に横浜市保土ヶ谷区で採集し、勝山学

芸員が *Monarda dispersa* Small と同定して、生命の星・地球博物館に収納されていたものである。一時帰化であろうとの判断から『神奈川県植物誌 2001』への記載を見送られたという経緯で、未記録であった。たまたま『千葉県植物誌』のシソ科を担当した筆者が、検討不十分のまま軽率にもヤグルマハッカとした写真を見て疑問を抱いた読者からの指摘を受け、改めて *Monarda* について認識を深めるべく生命の星・地球博物館で文献閲覧を主目的に勝山先生を訪れたところ、提示された標本の 1 枚が前記の吉川標本であり、『千葉県植物誌』でヤグルマハッカと誤認した植物も同種であることが明らかになった。このことを千葉県植物誌資料 No. 23 に報告するにあたり^{*}、本種の和名をハリゲヤグルマハッカと新称した。本種は北アメリカ原産の 1 年草で、茎は高さ 20-45cm、葉は倒皮針形～広線形で浅鋸歯があり、長さ 2-8 cm、茎の頂端および上部葉腋に花序が形成される。花序には長楕円形、赤紫色の多数の目立った総包がある。総包

片の先は急に細まり、先端に針毛状の突起を持つ著しい特徴がある。唇形花は淡桃色である。萼歯はきり状に長く伸びる。

標本：横浜市保土ヶ谷区花見台 吉川アサ子
1998.7.1 KPM-NA0113385.

② *Monarda mollis* L.

北アメリカ原産の多年草で、葉は厚くて硬い。花序は頂部だけに形成され、萼歯は三角形で頂部に密毛がある。この特徴は他の *Monarda* にはない。松本雅人氏が1999年7月2日に横浜市瀬谷区で採集した標本を勝山学芸員が *M. mollis* と同定し、生命の星・地球博物館に保管されているものがある。この標本はかなり貧弱で、植物の全体像を把握する資料としては不完全であるが、*Monarda* の識別形質として重要な萼は資料価値を失っていない。一時帰化の可能性や標本状態を考慮して『神奈川県植物誌2001』への記載が見送られた経緯があつて未記録である。しかし、前種ハリゲヤグルマハッカの件もあるので *Monarda* 情報として千葉県植物誌資料 No. 23 に報告した^{*}。ある程度、全体像が把握できる標本が得られた段階で和名の提唱を考えたい。

標本：横浜市瀬谷区上瀬谷 松本雅人 1999.7.2
KPM-NA0115692.

2. コバノイラクサ *Urtica laetevirens* Maxim. (イラクサ科)

西丹沢のバス停留所を降りて山に向かう林道は数え切れぬほど歩いているが、今まで不注意で見逃していたのか、新しく根をおろしたものか、2007年10月5日、バス停にほど近い林道側壁の上の斜面に、大きな株を形成している見慣れない植物が生えているのに気がついた。それをコバノイラクサと同定した。コバノイラクサは本州(近畿以北)、北海道、朝鮮、中国に分布があるとされているが普遍的な植物ではない。この植物に関する図鑑類の記述にはかなり不一致な部分もあり、今回の観察標本も疑問点が多い。しかし、葉が倒卵形で単鋸歯、茎は多くの枝を開出し、からまって大きな株をつくるという基本的な特徴は一致する。多年草で、茎の高さ1mほど、枝が頻繁に分かれて、株元がわからないほどからみあい、4稜があり、密に下向きの細毛が生え、上部には刺毛が散生する。葉は対生し、5-10mmの葉柄があり、葉身は三角状卵形、長

さ30mm以下、幅15mm以下、3行脈が目立ち、12対以下の整った単鋸歯がある。上面には微細な伏毛が密にあり、下面には開出する細毛が多い。刺毛は葉柄、枝に多く、葉身には少ない。刺毛に触れると痛い痛みはイラクサほどではない。托葉は各節に4片がある。花序は穂状で葉腋に着く。しかし、今回は雄花序の確認はできず、結実していない貧弱な雌花序の標本しか得られなかったので来シーズンの花期および結実期の観察に期待したい。イラクサ科の多くの種では雌雄同株で頂部葉腋に雌花序、下部葉腋に雄花序を着けるが、本種は頂部葉腋に雄花序を着けるという。私の観察は上記のようであるが、誠文堂新光社の『原色野外植物図譜6』(奥山, 1962)では茎の毛は上向きの細毛とし、線画が示されている。その植物写真の草姿はよく一致しているが、毛が上向きか下向きかは重要な相違点になる。葉の大きさについて4-10cmとする文献が多いが4cm程度とするものもある。葉の長さ3cm以下という今回の観察品が特に小葉の変異種であったのか疑問に思う。生育環境も溪流沿いの湿った林内とか、山の木陰とか記されている。筆者の観察したものは不安定な環境であり、枝がからみ合つて広がった株を形成している姿は、攪乱された環境に進入する先駆的植物のように見えた。いろんな意味で今後の継続検討が必要である。

標本：足柄上郡山北町東沢 城川四郎
2007.10.12 KPM-NA0130364 ほか。

※城川四郎, 2007. 千葉県植物誌 496 頁, シン科のヤグルマハッカはハリゲヤグルマハッカ(新称)であった。千葉県植物誌資料, (23): 206.

県央付近の新記録種について

(諏訪哲夫)

1. 東丹沢のルイヨウボタン (表紙写真)

東丹沢早戸川に近い林縁でルイヨウボタン *Caulophllum robustum* を記録したので報告する。『神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006』および『丹沢大山動植物目録2007』では絶滅種とされている植物について、報告の遅れたことをお詫びしたい。この植物に最初に気づいたのは厚木植物会の藤田千代子さんで、

2006年5月15日に花を観察したが、標本の採集はしなかった。2007年5月7日、再度訪れ、標本を採集した。生育地はスギ植林の林縁、北向きの斜面で、やや日陰の湿り気の多い環境で、12株を確認した。近くにはミヤマキケマン、ヨゴレネコノメ、コミヤマスマレが見られた。

標本：相模原市鳥屋（TS-5 標高 300m）諏訪哲夫 2007.5.7 KPM-NA0129113.

2. 愛川町および厚木市新産のタシロラン

愛川町と厚木市で2007年7月、タシロラン *Epipogium roseum* を採集した。生育地は両者とも落葉樹林の林縁。タシロランは1958年に三浦半島で初めて記録され、現在は三浦から真鶴までの沿海地に普通とされている。しかし、内陸部の愛川町や厚木市まで分布を広げたことは注目すべきことと思われる。

標本：愛川町八菅（AI 標高 350m）諏訪哲夫 2007.7.5 KPM-NA0129112, 厚木市中荻野（AT-1 標高 70m）諏訪哲夫 2007.7.10 KPM-NA0129111.

3. 厚木市に逸出のシナサワグルミ

2004年、厚木市の中津川中州に5mくらいの樹高のシナサワグルミ *Pterocarya stenoptera* を発見し、観察していたが、2006年、河川整備で根元から伐採された。しかし、その後萌芽し、現在4m超、3本の株立ちに成長している。

また、2007年6月、厚木市酒井の相模川河川敷の親水広場に樹高10mのシナサワグルミが実をつけていた。10年前に植栽されたが、逸出状態に近い。

標本：厚木市三田（AT-2 標高 35m）諏訪哲夫 2004.11.10 ACM-PL31850, 厚木市酒井（AT-3 標高 15m）諏訪哲夫 2007.6.27 KPM-NA0129109.

4. 厚木市荻野のシロバナタンポポ

荻野川に近い畑の土手のシロバナタンポポ *Taraxacum albidum* に気づき、2004年頃から観察しているが、2007年、標本を採集した。長さ200mほどの南向きの土手に1月末から開花する。1980年代に下荻野の道路際で見たことがあるが、現在その付近では見られない。

標本：厚木市中荻野（AT-1 標高 60m）諏訪哲夫 2007.3.28 KPM-NA0129108.

5. 厚木市飯山のアマナ（表紙写真）

2006年4月、小鮎川に近い林縁にアマナ

Amana edulis の小群落が花をつけているのに気づき、2007年にも同様の状態を観察した。20株程度のもので、いつ失われても不思議でない環境である。これまでは画像で記録するにとどめているが、2008年には標本を採集したい。なお、1950年代に厚木市中荻野で観察したことがあるが、最近、県央地区の標本の記録はない。『厚木の花めぐり』（諏訪、2006）の50頁参照。調査メッシュはAT-3、標高120m。

6. 厚木市中荻野のサガミラン（表紙写真）

2005年7月、雑木林の林縁にサガミラン *Cymbidium macrorhizon* form. *aberrans* を3株発見した。開花株は1株で、2株はつぼみ。株数が少ないので画像で記録するにとどめた。『厚木の花めぐり』（諏訪、2006）の66頁参照。調査メッシュはAT-1、標高90m。

7. 宮ヶ瀬のカラコギカエデ

2007年7月、園地の奥、イロハモミジに混じってカラコギカエデ *Acer ginnala* var. *aidzuense* が実をつけていた。宮ヶ瀬湖の造成に伴い植栽されたものようだが、野生に近い状態で生えているので記録しておきたい。

標本：清川村宮ヶ瀬・及沢（KI-2 標高 300m）

諏訪哲夫 2007.7.19 KPM-NA0129107.

8. 宮ヶ瀬早戸川林道のヤマククルマバナ

標高300m、日当りのよい林道脇の枝先を挿し木にした所、2ヶ月後の2005年7月22日開花した。小苞が目立つのでクルマバナと同定しておいたが、再検討の結果、ヤマククルマバナ *Clinopodium chinense* ssp. *grndiflorum* var. *shibetchense* と同定したので報告したい。一見イストウバナに似るが、次のような特徴がある。

①生育地は日当たりがよい、②萼は緑色で、長さ5mm、白毛と腺毛がある、③萼の下に長さ4-5mm、5-6本の目立つ小苞があり毛が多い、④花は6-7mm、淡いピンク色、⑤葉はやや厚い。

平凡社の『日本の野生植物 草本III』（1981）の記載にはほぼ一致するが、『丹沢大山動植物目録2007』では、中国産類似種との検討が必要としている。

標本：清川村宮ヶ瀬（KI-2 標高 300m）諏訪哲夫 2007.8.24 KPM-NA0129105.

注）文中の厚木植物会は、県央ブロック会員を中心に、標本の記録だけでなく、啓発、保全も視野に活動している組織である。（2007.9.10 記）

平塚にアレチニシキソウ

(浜口哲一)

平塚市南原で、2007年10月23日に会員の松下弓子氏によってニシキソウの1種が発見され、検討の結果、アレチニシキソウ *Chamaesyce* sp. であることが分かったので報告する。本種は平塚市内だけでなく、湘南エリアからも初めての記録となるものである。

このニシキソウは、長さ約1.5mmある果実を正面から見ると、正三角形をしていて、その稜だけに長い白毛が生えている。『神奈川県植物誌2001』によると、こうした特徴を持つ種としては、アレチニシキソウ、ハイニシキソウの2種があり、茎の全周に毛が生えていること、種子の長さが約1mmあることなどから、前者であると判断した。

発見された場所は、横浜国立大学平塚農場入り口付近の路傍で、数株が点在していた。標本は平塚市博物館に保存してある。

標本：平塚市南原 浜口哲一 2007.11.5 HCM 未登録。



アレチニシキソウ (平塚市南原 2007年11月5日 浜口哲一撮影)。

川崎にミズヒマワリ

(吉田多美枝)

2007年9月、かわさき自然調査団昆虫班の鎌倉正人氏より、等々力緑地の池にミズヒマワリが生えているというメールが入ったという連絡が、調査団事務局からあった。

9月27日にミズヒマワリに対面すべく、等々力緑地に出掛けた。場所については等々力緑地の池と言うだけだったので、初めて見る植物でもあり、見つかるとかどうかが心配であったが、池を目指して行くと大型の植物なので遠くからもそれと判った。

等々力緑地には釣り堀にしている深い大きな池と、自由に水辺に近づける小さくて浅い池があ

る。ミズヒマワリは小さくて浅い池の縁の水の中に生えていた。台風で倒れたものが再び起きあがって咲いている様子は、丈夫な植物だと言うことを物語っていた。

1m x 1mの範囲に繁殖していたが、倒れて、節から根を出している様子からは1株と見受けられた。ちぎれた茎の節から根を出し、流れに乗って移動すると言われているが、この池は独立しているの、今のところは他の場所への流出は心配なさそうであるが、瘦果の繁殖力が不明なので、この後の推移を見守りたい。

川崎市では初産、『神奈川県植物誌2001』にも報告のない植物なので写真撮影の後、採集して標本にした。

標本：川崎市中原区等々力(等々力緑地)

2007.9.27 吉田多美枝 KYS182990 ほか。

相模湖町のキセワタとアキノハハコグサ

(秋山幸也)

相模原市立博物館が、合併した新市域を対象に実施している調査も丸1年半が過ぎようとしています。資料調査員の宮崎卓さんと相模原植物調査会の有志のみなさんを中心にめざましい成果があげられています。中でも新産、希産の記録がぞくぞくと出てきて、一部は前号までにご報告しているとおりです。今回は、2007年10月17日に実施した相模湖町寸沢嵐のとある林道での調査から、絶滅危惧種2種の現況についてご報告します。

キセワタ *Leonurus macranthus* Maxim. (シソ科)

『神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006』では、絶滅危惧 I B 類。日当たりの良い林道法面下部の1ヶ所で、先頭を歩いていた菅沼広美さんが約10株を発見されました。法面というよりも林道の脇といった方がよい場所で、踏みつけや草刈りなどの攪乱の影響が強く、安定した立地とは言えません。ただ、株はいずれも1m以上の大きなもので、個体群としては比較的健全なのかもしれません。もう少し早い時期に周辺をよく探索すると、もっとたくさん見られるかもしれません。ちなみに、その後の情報交換の中で、同所において直前に菅澤桂子さんも確認されていたことが分かりました。

標本：相模原市相模湖町寸沢嵐 2007.10.17 宮崎卓 SCM29605.

アキノハハコグサ *Gnaphalium hypoleucum* DC. (キク科)

林道法面の被覆の隙間などに、数株が見られました。林道を往復した調査行程の往路で、秋山や宮崎さんがそれぞれ「もしかしてこれは」と思いつつ歩いていたのですが、折り返した直後、数株目に見た個体が典型的な特徴を有していて、決め手となりました。個体数は少なく、キセワタと同様、植生管理による攪乱の多い立地に生育していました。本種は、健全種のアキノハハコグサとの混同によって分布未確認の地域があるものと思われ、調査を進めれば周辺地域ではさらに多く見られる可能性があります。

標本：相模原市相模湖町寸沢嵐 2007.10.17 宮

崎卓 SCM29602.

なお、本調査の途中経過について、今年度末に発行の相模原市立博物館研究報告第17集でご報告する予定です。



左：キセワタ，右：アキノハハコグサ（相模原市相模湖町寸沢嵐 2007年10月17日秋山幸也撮影）。

鉢から出てきたショウジョウソウモドキ (林 辰雄)

同好者と団地の近くで、花壇の花作りの手伝いをしている。間口14m×奥行き33mとかなり広い場所で、雑草取りがたいへんな作業だが、広いだけに思わぬ帰化植物や、栽培品からの逸出と思われるものがいろいろ見られて、それはそれでおもしろい。イチビやオジギソウは今でもゲリラ的に芽をだし、数年前にはコエンドロが1株花をつけた。

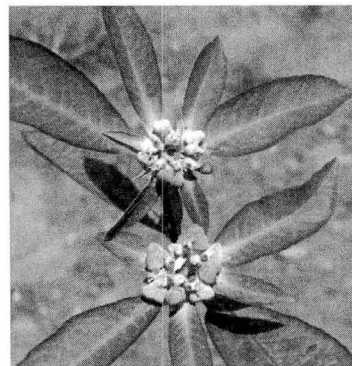
2007年8月7日、鉢の中から見慣れない草本が伸びているのに気がつき、調べてみたらショウジョウソウモドキ *Euphorbia heterophylla* L. だった。南アメリカ原産のこの植物は、沖縄には帰化しているが、『神奈川県植物誌2001』によると、1997年11月24日に松本雅人が横浜市瀬谷区の米軍通身隊付近の畑地で採集したのが、本州での初めて記録ではないかとされ、その後は記録されていないようで、一時帰化したものと考えられている。この希少な帰化植物が、なぜ放置された植木鉢の中からでてきたのか、興味があるので報告いたします。

この鉢は直径30cmほどで、春にフリージアの球茎を植え込み、花が咲いて葉が黄色くなつてから掘りあげた後は、ずっと放置しておいたもの。用土は花壇のものを使用したから、考えられるのはフリージアの球茎に、ショウジョウソウモドキの

種子がついていたのだらうということだが、長さ3mmほどで凹凸のある卵形のショウジョウソウモドキの種子が、その大きさからして球茎に付着していたとも考えにくい。気がついた時は高さ55cmほどになっていて、根元から40cmのところから二又分枝を繰り返して、花はすでに終わっていて、杯状花序から径6mmほどの蒴果ができていた。放置後は水もやらず、今夏の猛暑続きで土はからからに乾いていたが、それでも枯れなかったのは、かなり乾燥に強い植物だと思われる。

ショウジョウソウの葉が長楕円状で、先端が三角状に尖り中央部が深くくびれ、包葉が赤く色づいて観賞価値があるのに比べ、ショウジョウソウモドキの方は、葉が長楕円状披針形で、縁に

時に不規則な突起状の鋸歯がでて、包葉の基部がわずかに白くなる程度で観賞価値はなく、両者の違いは一見して明らかである。



ショウジョウソウモドキ（横浜市栄区飯島町 2007年8月7日林辰雄撮影）。

ツタの葉柄

(浜口哲一)

秋が深まりツタの紅葉が目立つ季節になった。毎年、この頃になると不思議に思ってきたのは、ツタの葉の葉柄と葉身の間にはなぜ関節があるのかということである。壁に張り付いたツタのつるに、葉柄だけがつつんと残っているのを見かけることも多いので、関節の存在には気づかれています方も多いだろう。

今秋になって、この疑問に、「もしかして」という答えが見つかった。若いツタの葉は、しばしば3小葉からなる複葉になるが、ツタの場合、見かけは単葉になっても、その複葉としての性質をいつまでも残しているのではないかと考えたのである。複葉であれば、頂小葉も関節を持っていて、葉柄から離れて落ちるのはありふれたことだろう。

単なる思いつきだし、どこかですでに記事になっているのかもしれないのだが、自分のアイデアがちょっと嬉しかったので書かせていただいた。

『神植誌 01』の「植物の種類数」の訂正

(田中徳久)

『神植誌 01』に掲載されている植物の種類数は、1456 頁に「植物の種類数」として4つの表により示されているが、その一部に誤りがあり、『神奈川県植物誌 2001 正誤表 (2002 年 2 月 1 日)』に再掲されている。

しかし、今更ではあるが、パソコン上のデータに誤りがあり、その数を再度修正すべきであることが分かった。あまり大きな違いではなく、『神植誌 01』刊行後、新たに記録された植物もあり、各標本庫で同定が変更されたも

のもあると思われ、実際の神奈川県に分布する植物の数自体も変化しているが、今後のために記録を残しておく。

① 2 番目の表の単子葉の帰化植物数は「199(2)」となっているが、4 番目の表の単子葉の帰化は「196」となっている。2 番目の表の () 内の数字は雑種の数を示すものなので、雑種を除いた単子葉の帰化植物の数が、2 番目の表では 197 となり、4 番目の表では 196 となっていることになる。

『神植誌 01』で使用した見出しのデータベースを検討したところ、2 番目の表の数字により算出した値が正しく、単子葉の帰化植物の雑種を除いた数は $199-2=197$ が正しく、196 は誤りであることが判明した。よって、帰化植物の合計は 832 となる。

② 掲載種数を算出したデータベースを再検したところ、在来植物の雑種 5 種を帰化植物としてカウントしていた。最初から雑種を除いている 4 番目の表は影響ないが (前述の単子葉植物の 196 → 197 の正誤は別)、2 番目の表は以下のものが正しい。なお、この修正にともない、田中 (2003. 『神奈川県植物誌 2001』に用いたデータによる市町村および -- 地域メッシュごとの植物数. Flora Kanagawa, (55): 684-687) の帰化植物の数もそれぞれ修正されるが、ここでは割愛した。

	在来		帰化		合計	
シダ植物	328	(71)	5	(0)	333	(71)
裸子植物	21	(0)	2	(0)	23	(0)
単子葉植物	<u>613</u>	<u>(14)</u>	<u>198</u>	<u>(1)</u>	811	(15)
双子葉植物	<u>1,364</u>	<u>(72)</u>	<u>648</u>	<u>(20)</u>	2,012	(92)
離弁花	<u>861</u>	<u>(53)</u>	<u>369</u>	<u>(12)</u>	1,230	(65)
合弁花	<u>503</u>	<u>(19)</u>	<u>279</u>	<u>(8)</u>	782	(27)
合計	<u>2,326</u>	<u>(157)</u>	<u>853</u>	<u>(21)</u>	3,179	(178)

事務局より

論文の紹介

少し前のことですが、会員の金子紀子さんが、田中肇さんほかの方々、種生物学会の英文誌 Plant Species Biology Vol.21 No.3 にガガイモの柱頭の位置や訪れる昆虫についての論文をまとめられています。著作権などの関連で、その内容を自分たちで広く配布できなかったようですが、その期限も過ぎたため、[http://homepage3.](http://homepage3.nifty.com/o-kita/ga/gaga_betu1.html)

[nifty.com/o-kita/ga/gaga_betu1.html](http://homepage3.nifty.com/o-kita/ga/gaga_betu1.html) で、PDF ファイルなどを見ることができます (和文版も)。ぜひ、ご一読下さい。

総会のご案内

2008 年度の総会は、2008 年 4 月 12 日 (土)、13 時より、相模原市立博物館において開催されます。総会後には田中 肇さんによる講演「花と昆虫 - 共生とだましあいの世界 -」も予定されております。ぜひ、ご参加ください。